ハイイヌガヤ　*Cephalotaxus harringtonia* (Knight ex Forbes) K.Koch　var. *nana* (Nakai) Rehder

イチイ科　Taxaceae

1.　利用対象部位：樹皮および幹

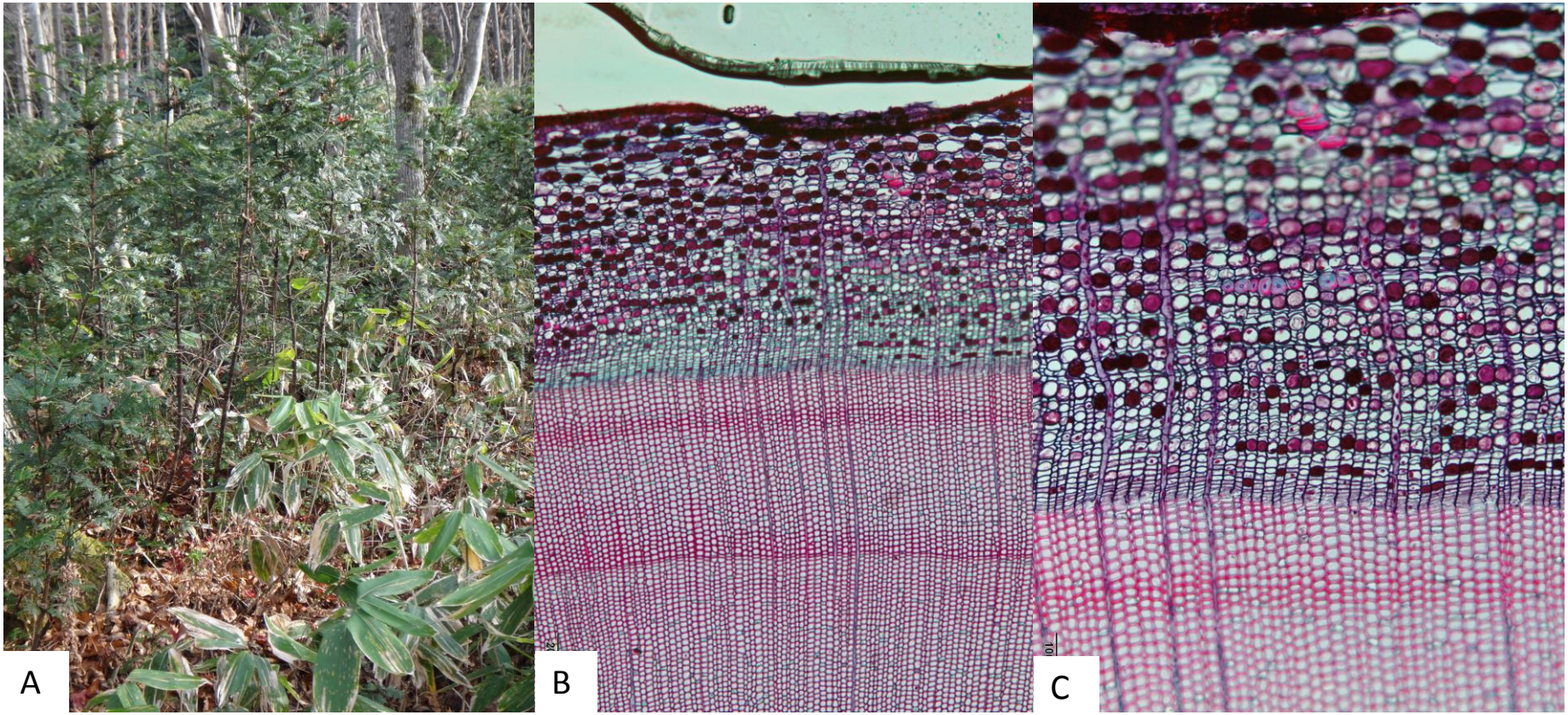
2.　組織形態：

　樹皮は縦長の不定形の厚紙状にはげ落ちる。幹が太くならないので樹皮は薄い。

　内樹皮は柔細胞-篩細胞-柔細胞の順にそれぞれ 1 細胞層の厚さで形成される。肥大成長でこれらの組織が押し出されて外方に行くにしたがって篩細胞は機能を失って潰れ、柔細胞が丸く膨らんで大きくなり、さらに外方では柔細胞から繊維細胞がところどころに分化してくる。繊維細胞は断面長方形～丸みを帯びた形で壁が厚い。樹皮の放射組織は単細胞幅。

3.　利用例：なし

4.　遺跡出土遺物：樹皮の出土例はなし。丸木の弓、手網枠、棒などとして出土して「イヌガヤ」と同定されたもののうち、本州日本海側北部の遺跡出土品はハイイヌガヤである可能性がある。



A:ハイイヌガヤの幹（北海道野幌原生林）。 B＆C:内樹皮の横断面とその拡大．画面下半分が二次木部。細胞壁が黒く染まっているのが柔細胞、細胞壁が青色で細胞内容物が無いのが篩細胞、赤～青紫色で断面方形～丸形なのが繊維細胞。柔細胞-篩細胞-柔細胞の順にそれぞれ1細胞層の厚さで形成され、肥大成長でこれらの組織が押し出されて外方に行くにしたがって柔細胞は丸く膨らむ。さらに外方でところどころに柔細胞から繊維が分化してくる。樹皮の放射組織は単細胞幅。